

【石の俗称】

蛇の石

遠藤 祐二¹⁾・加藤 碩一²⁾

新しい世紀に入った2001年も残り少なくなりました。今年の干支は「巳」、つまり「蛇」の年でした。そこで、今年の締めくくりとして蛇に因んだ石(岩)をいくつか紹介してみようと思います。

蛇紋岩(じゃもんがん)

蛇の字のついた石として、誰もが真っ先に思い浮かぶのは「蛇紋岩」でしょう。かんらん岩などの超塩基性岩が変質(蛇紋岩化作用)してできるこの石は、暗緑色から黄緑色まで色の変化に富み、特有の縞模様とヌメった感じが蛇の肌を思わせることから、その名が生まれました(写真1)。変質の過程で、元々のカンラン石や輝石が「蛇紋石」に変化しますが、蛇紋石は単独の鉱物名ではなく、クリソタイル、リザルダイト、アンチゴライトなど、蛇紋石族の鉱物の総称であることは、案外知られていないかもしれません。色彩や模様の美しい蛇紋岩は装飾建材に用いられ、埼玉県皆野町の「鳩糞石(きゅうふんせき)」は特に有名です。

ところで、蛇紋岩は地学の専門用語ですから、俗称とは言えないとの抗議がありそうですが、話はここからです。

蛇紋岩の仲間は岩石の中でもとりわけ比熱が高い(温まり難く冷め難い)という性質があります。つまり、一度加熱してしまえばその熱は永く保持されるわけで、別名「温石(おんじゃく)」と呼ばれる所以はこの性質に由来します。現今のように使い捨てカイロ(懐炉)などという便利な物のない遥か昔には、温石は暖身用、あるいは腹痛の治療用として重宝されたのです。

さらに、昔の修行僧は一日一食(または二食)が規りとされており、訪れた先で飲食を供されること

は決してなく、代わりに接待されたのは一個の温めた石でした。これを懐中にして胃の部分を暖めることで、空腹に騒ぐ腹の虫を抑えたといわれています。この石を「懐石(かいせき)」と呼び、その精神を残しながらも、後にはささやかな食事を出すようになりました。これが懐石料理のルーツなのだそうです。とすれば、もともとは大変に質素だったはずの懐石料理が、何時の間に現在のように豪華絢爛な食膳に変わってしまったのでしょうか。どうやら飽食の時代には、修行僧の精神などは何処かへ消し飛んでしまったようです。

料理の話が出たついでに、「焼石(やきいし)」というのがあります。桶のような容器に新鮮な魚介を野菜と一緒に出し汁に入れ、そこへ赤くなるまで熱した石をそのまま放り込んで瞬時に沸騰させる料理を「わっぱ汁」といい、放り込まれる石が焼石というわけです。土地によって呼び名は変わりますが、漁師料理に由来する調理法だそうです。

懐石や焼石になると、もはや蛇紋岩である必然

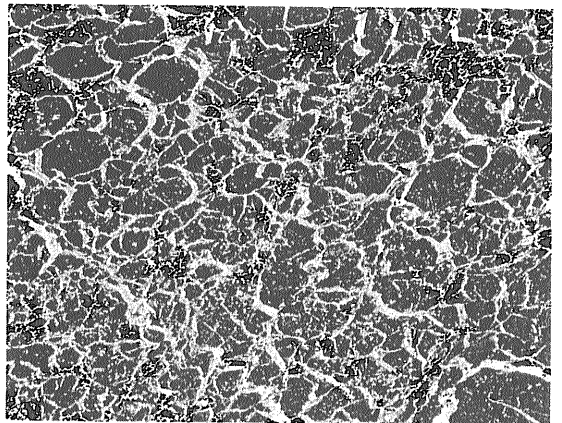


写真1 蛇紋岩の岩肌。

1) 産総研 地質標本館
2) 産総研 地球科学情報研究部門

キーワード: 蛇, 蛇石, 蛇紋岩, 蛇紋石, 温石, 懐石, 蛇喰蟹

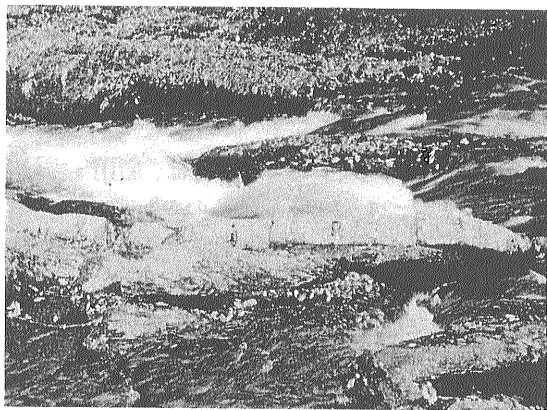


写真2 横川の蛇石。

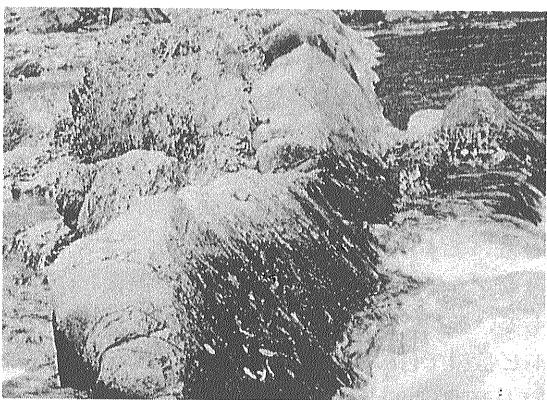


写真3 蛇腹状を構成する石英細脈。

性はうすれ、黒っぽい石なら何でも使われているようです。話もすっかり脇道にそれてしまいました。本題の蛇の石に戻しましょう。

蛇石(じゃいし・じゃせき・へびいし)

そのものズバリ、蛇に似た形から名付けられた「蛇石」は各地にあります。代表的なものは「横川の蛇石」でしょう。長野県辰野町を流れて天竜川に注ぐ横川川の上流にある大蛇のような形をした岩脈です(写真2)。硯石にも使われる古生層の黑色粘板岩の地層面に沿って貫入した閃緑岩の岩脈(岩床)で、大小2本が見られます。岩脈の肌をほぼ等間隔で多数の石英脈が横切り(写真3)、まさに蛇腹そのものです。川中において流水に洗われる様は、あたかも大蛇がうねっているかのように見えて壮観です。国の天然記念物に指定されています。

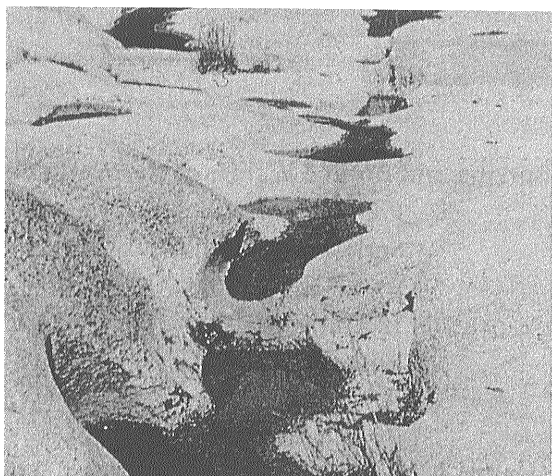


写真4 玖島川の蛇喰磐。

蛇喰磐(じゃぐいいわ)

同じく天然記念物になっている「蛇喰磐」というものもあります。広島県と山口県の県境を流れる小瀬川(木野川)の中流に、山口県側から合流する玖島川くしまの河床にある甌穴群おうけつの呼び名です(写真4)。花崗岩の岩盤にできた多数の甌穴が節理に支配されて溝状に配列し、あたかも蛇の喰い痕のように見えるところから名付けられたそうです。蛇が岩をかじるものかどうかは疑問ですが、おそらくは、巨大な蛇神(?)がこのあたりの溪谷を噛み造ったとの伝説があるのかもしれませんが。

その他、「蛇含石」、「蛇骨石」、「蛇体石」、「蛇頂石」、「蛇糞石」等々、蛇の字の付く石はまだあります。ご興味のある方は「石の俗称辞典」(加藤・遠藤, 1999)をご覧ください。

現実のヘビはとかく嫌われ物。同じ爬虫類のカメヤトカゲよりも忌み嫌われるのは可愛そうです。せめて石になった蛇だけでも愛でてやって欲しいと思います。

さて、来年は馬の年です。今回は馬に因む石のお話でお目にかかりましょう。

文 献

加藤嶺一・遠藤祐二(1999):石の俗称辞典。愛智出版。312p.

ENDO Yuji and KATO Hirokazu (2001): Stone names related with serpent.

< 受付: 2001年11月19日 >